



## オプティム社長 菅谷俊二さん

何事でも初めて成し遂げることは難しい。逆に困難と思われていることでも、誰かが達成すると、それに続くものが次々に現れてくる。「不可能」と思われていたことが「可能」であると分かると、その壁は簡単に乗り越えることができる。

今回の特集では佐賀で大きな壁を乗り越えた“先駆者”にその挑戦を振り返っ

# 壁

## 佐賀の“先駆者”に聞く

# の乗り越え方



## 佐賀県初のプロ棋士 武富礼衣さん

てもらい、それぞれの攻略法を聞いた。佐賀という場所から、大きな世界に羽ばたいたその道のりを知れば、違う分野であっても「不可能」が「可能」に思えてくるだろう。そうなれば壁のほとんどはもう攻略できている。



## 元日本インターナショナル選手権ファイナリスト

## 川津三智子さん



## AI・IoT・Robot 新領域に挑む オプティム社長 菅谷俊二さん

「壁」というと、やっぱり農業、製造業、水産業などいろんな業種の課題解決をAI・IoTを活用して支援するサービス「クラウドIoT・ROS」を発表して、AI・IoT・Robot分野へと大きく舵を切ったときですね。なのでまだ壁を乗り越えていない(笑)。チョモランマの氷壁に必死にしがみついている状態です」。株式会社オプティム代表取締役の菅谷俊二さんは茶目つぱな語り口で話

### ■実は臆病なんで：

オプティムは2000年、当時佐賀大学生だった菅谷さんが友人とともに立ち上げた。ITサービスの開発を手がけ、2014年にマザーズ市場に上場。その翌年には東証一部に上場。ちなみにオプティムという社名は最適化(optimization)と楽観主義(optimism)を組み合わせた造語だ。「23歳のときに創業したので、そういう話だとすると無鉄砲に思

われますが、実は自分は臆病だと思っています。こういう製品が流行るな、とかこういう技術が普及するだろうな、と思っただけでなかなか踏み切ることができなかった。世界を変えるような大きな技術革新をずっと目指していました。でも売上が見えない、利益が見えない、競争も多そう。その葛藤を創業以来抱えていました。なのでAI・IoT・Robot分野のど真ん中で勝負するという決断は大きかったです」。

ちよっとAI・IoT・Robotの説明を。AIとは人工知能のこと。コンピュータの持つ情報処理能力を活かし、いろんなデータを自ら蓄積、分析、活用すること人間にしかできなかった仕事を手伝わせることができる。IoTはアイオーティーと読む。「Internet of Things」の略称で「モノのインターネット」のこと。家電など様々なモノがネットを介して接続されるだけでなく、その情報を活用することにより社会分析のための基本データが収集でき

# 佐賀から世界を変える

る。Robotは文字通りロボットのこと。人の代わりに作業を自律的に行う装置やプログラム。人や猫型だけではなく、ドローンや自動運転車も含まれる。これらの技術が重要視される背景には少子高齢化がある。「アマゾンやグーグル、アリババなど超有名企業が取り組んでいる今後の世界のベースとなる根本的な技術です。未来を変えるくらいの大成功もあれば、まったくゼロになる可能性も大きい。でもオプティムは技術革新で世界を変えることを目指して立ち上げた会社。企業理念には「存続を目的としてはいけない」という言葉がある。最後は初心に後押しされました」。

### ■日本初のAIストア

佐賀大学構内に今年3月にできた「モノタロウAIストア」。プロ向け工業用資材の大手通販サイト「MonotaRO」初の実店舗となる同店は常駐スタッフが1人もいない無人店舗だ。お客さんは専用アプリを使って入店し、自由に品定めをした後、決済する。ネットショッピングサイトが現実になり上がったような未来感。パトチャルゲームの中に入り込んだような不思議な感覚だ。オプティムはシステム開発を担当。AI技術を活用し、防犯だけでなく効率



### 菅谷さん著書プレゼント



「ぼくらの地球規模イノベーション戦略 IT分野・日本人特許資産規模No.1社長のこれまでと次の挑戦」をサイン付きで5名さまに★応募方法はP136へ

的な発注も行って。世界初はアマゾンに取られちゃいましたが、日本で初めてのAIストアです。人があふれる街でAIストアをオープンしても意味がない。特定の人しか来ないようなエリアでも小売が成りたつということが新しい付加価値になるね、ということとで佐賀大学に作りました。万引き被害もないですし、売上もどんどん上がっています。いろんな業種から提携オファーが殺到しています」。

オプティムは佐賀大学や佐賀県と連携して、農業や漁業、医療などあらゆる分野でAIやIoTを活用するプロジェクトを進めている。「白石平野に世界最大級のドローンを飛ばして撮影した画像を人工知能が解析して農作物の状態が実際に人が目で見なくても確認できるようにしました。農作業の半分を占める農地巡回の手間を少なくします」。同社では「ピンポイント農業散布テクノロジ」を開発し、従来と比べて農薬9割削減に成功した大豆を商品化。通常の3倍の価格で販売しているという。佐賀を舞台に未来の風景が広がりに続ける。「佐賀には可能性があります。人口減少している場所からしかAI・IoT・Robotのイノベーションは生まれません。そして農業はAIに一番向いている分野。AIはほとんどの分野で人の仕事を奪う存

### ■佐賀藩のDNA

在ですが、農業は手間をかけるほど良いものができる。これまで生産者の方が手間をかけて食材を育てるようにAIとRobotが「手間」をかけて美味しい食材を育てる。人とAIの共存が社会を進化させる、そういう未来が農業にはあります」。

今年150年前の明治維新から150年。菅谷さんの話を聞いてみると、幕末維新期の先達はこんな感じで目をキラキラさせながら事にあたっていたのかな、とつい空想してしまふ。「日本は今、大きな変化を迎えています。足元を見れば少子高齢化、労働力減少。若者が少なくなる非常に苦しい局面です。だからこそ人の代わりとなるAIやIoT・Robotを大きく活かせる。重要なのはアメリカや中国に勝てないと諦めないこと。150年前の佐賀藩もそうだったと思うんですよ。敵わないと思うのではなく、自分たちで習得して応用してもっとすごいものを作ってやれ、という気概。自分たちが挑戦者であるということを理解して異国を徹底的にリスベクトして、その技術を吸収して自分たちのオリジナリティを作っていた。それが今の日本を育んだ原動力だと思っています。だから佐賀という場所がイノベーションを起こして世界を変えていくというのは必然性がある物語だと思っています」。

「壁があるということは上へ進むチャンス。逆に壁がないということは同じ位置にいるということ。棋譜を見て反省して、課題を見つけて、足りない部分を理解する。自分の成長を量り、次のステップへ挑みます」。佐賀県初のプロ棋士・武富礼衣さんは大学の勉強との両立を楽しみながら、勝負の世界を切り開く。

## ■中学3年生で決断

5歳のときに3歳上のお兄さんの影響で将棋を始めた武富さん。プロ棋士を目指す決めたのは中学3年生のときだった。「小学生時代はピアノも好きでしたが、高校進学を考えたときに、将棋のプロの道が見えて、東京に通う選択をしました。そのため龍谷高校に決めました。公立進学校も選択肢にありましたが、私立の方が少人数クラスなので勉強も先生に相談しやすいと考えました。武富さんは大学で学びたい分野があった。「心理学に興味を持ったのも中学3年生からです。当時の先生に勉強や将棋のことを相談すると、すごく的確な答えが帰ってきました。その先生が心理学を勉強していたことから関心を抱きました」。ちょうど新設されたばかりの立命館大学総合心理学部への進学を目指した。

研修会入会からプロ資格に挑戦する女流三級までは4カ月と異例のスピードで昇進。最後のステップである女流二級への挑戦は2年間というタイムリミットがあった。「授業が終わった後も学校に残って課題を終わらせてから帰宅。家では深夜まで将棋の勉強をする毎日でした。毎月2回は東京へ行って対局をしなくてはなりません。日曜夜に帰ってきて徹夜で定期試験の勉強をすることもありました。特進コースに所属していたので勉強優先を求められます」。

## ■家族と郷土の応援で

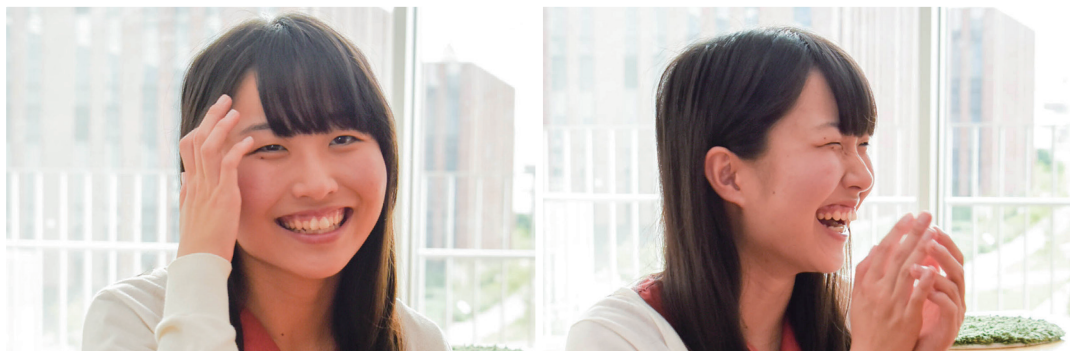
女流三級ではプロ棋士とも対戦する。なかなか勝てない日々が続いた。気がつけばタイムリミットまで残りわずか。同時に受験も目前に迫る。「高校3年生のときの先生が両立に理解を示してくれたのが大きかった。メンタル面ですごく楽になりました」。志望していた立命館大学への入学が十一月に決まってから連勝が始まる。そして今年2月の女流名人戦予選の準決勝。強豪の岩根忍女流三段を下し佐賀県初のプロ棋士となった。「家族のサポートが一番の力でした。佐賀のみさんの応援にも背中を押してもらいました」。

特集

## 壁の乗り越え方 佐賀の“先駆者”に聞く

# 佐賀県初のプロ棋士 立命館大1年 武富礼衣さん

## 壁は上へいくチャンス



対局前に上峰町で王将戦があり、解説の聞き手として参加しました。小学生のときに対戦したおじさんから「おっちゃん、あんたに負けて2年、将棋辞めたよ(笑)」応援しとるけん！とか『将棋世界を毎月買って、あんたが出るのを見るからね』と声をかけてもらいました。地元のみさんの気持ちがすごく心に響きました。絶対次で決めます、と断言したので、ここで決めなきやアマに落ちると思って、集中を切らさず全力で挑みました」。

## ■勝って佐賀に恩返し

プロ女流棋士で現役大学生はわずかに3人。進学したものの両立を諦めた人もいるという。「だいたい週に1回、東京で対局があります。前に移動して、翌朝1限目に授業がある場合は対局後の夜に帰ってきます。普段は大学の授業が終わったら関西将棋会館で夜9時までプロ棋士と勉強。対局2日前からは家で研究

しています。好きな勉強ができるし高校時代よりも楽です。むしろ性格的に大学に行っていないとだらけていたかもしれません」。

現在、挑戦している女流名人リーグではトップランクの棋士と対戦する。「序盤、中盤、終盤、すべてに差があると感じています。一番印象に残っているのが上田初美女流四段との対戦。序盤の20手目から穴熊の隙きを突かれて良いところを出せずに完敗しました。勝ち進まないという人と戦えない。弱さを知ったほうがタイトルに近づけます。悔しいけど、それを糧にしたい」。

最近の息抜きは関西将棋会館で勉強した後、近くにある某有名テーマパークへ行き、閉園までの1時間、絶叫マシオンを乗り倒すこと。「遊んでいるとちょっと罪悪感があります(笑)」。プロ棋士になった以上、勝つことを追求するのは当たり前。いかに魅せる将棋を指すか、だと思えます。師匠からはバランス型の将棋と言われますが、終盤がうまいとか、守り通す力があるとかそういう武器がほしい。それがあればタイトルに近づく。私が勝つことで佐賀の将棋界を盛り上げたいと思っています。地元に戻ったときは積極的に子どもに教えたい。私にとっても刺激になると思うので」。

## 武富礼衣女流棋士 昇級昇段祝賀会

〈日時〉平成30年9月1日(土)  
〈場所〉ホテルニューオータニ佐賀 鳳凰の間  
〈参加費〉一般 5,000円  
高校生以下 2,000円  
(保護者同伴の場合)  
〈時間〉12:00~14:00

数人のプロ棋士も来場!!  
皆様のご参加をお待ちしています。

〈申し込み先〉日本将棋連盟  
佐賀県支部連合会 事務局  
山口 宗一郎 まで  
電話/070-5414-5607

## 川津先生の講座

### ディスコダンス

講師/川津三智子  
時間/第1・3(金)11:00~12:00  
定員/20名  
受講料/1回あたり1,296円  
維持費/1回あたり216円  
準備物/動きやすい服装

### New 社交ダンス

講師/川津三智子、大川日出紀(元日本インターナショナル選手権・全日本選手権ファイナリスト)  
時間/第1・2・3(金)19:00~20:30  
定員/20名  
受講料/3,888円/月 維持費/972円/月

お問い合わせは佐賀新聞文化センター ☎ 0952-25-2160 まで <https://www.saga-sbc.jp>



## 元日本インターナショナル選手権ファイナリスト 競技ダンス 川津三智子さん

## 特集 壁の乗り越え方 佐賀の“先駆者”に聞く

「壁を乗り越えるには基本練習あるのみ!!人や物のせいにはしない。すべて自分で乗り越えるしかありません」。日本の社交ダンスの頂点で活躍した元日本インターナショナル選手権ファイナリスト・川津三智子さんの答えは力強い。

### ■A級を18年間守る

川津さんがダンスを始めたのは24歳から。すぐに東京のダンススクールにプロとして弟子入り、ダンス漬けの生活を送る。生真面目な川津さんは黙々と課題を見つけて解いていく。「内向的な性格を変えようとして飛び込んだダンスの世界ですが、やっぱり真面目にしかできない。そういう姿を認めてもらったのが良いパートナーに恵まれました」。

昇格。競技ダンスのトップクラスである。その座を保ち続けるためには、1年間で全日本クラスの大会でファイナル(6組)に2回以上入らなくてはいけない。その頂点に川津さんは18年間立ち続けた。「大きかったのが海外留学です。イギリスでは毎年、計4カ月を過ごしました。英国人のダンスは高尚で日本とは違う世界に生きている感じがしました。壁がすごく高かったです。あの時代の本場は英国。自分が一番というのを譲らない。そういう状況でもやるしかない!崖から飛び降りる覚悟で競技会にも出ました」。福岡から東京、そして海外へ。次々と自分を厳しい環境に置く。「課題が見つかる絶対やりたくなる。壁がなくなったらかえってストレスがたまりません。だから課題だらけの環境に飛び込むんですよ」と川津さんは笑う。さ

らにアメリカにも留学。「すごくオーブンな雰囲気ですダンスを楽しめました。イギリスが床にウェイトを乗せて踊るという基本をすごく大事にするのに対して、アメリカはボディを空間に舞わせる華やかなダンス。その両方をバランス良く身につける必要があります」。

### ■指導者も勉強怠らない

劇団四季の振付などを担当した山下康雄さんの言葉に「ダンスに大事なものはすべて『かきくけこ』の中にある。『か』は感性、『き』は気魄、『く』は苦悩、『け』は謙虚、『こ』は個性」というものがある。川津さんは自分のダンスを振り返って「感性には自信がありました。音楽やパートナーに対しての感性。相手の動きに対してスムーズにリアクショ

## 壁がないとストレス

ンができます。どんな人でも踊れる自信があります。逆に気魄がちょっと足りなかったかな」と語る。

競技生活を終えた後も川津さんは次の壁に挑む。筑波大学の学生の指導を引き受けた。「最初は全日本団体で20位くらいの部でした。まずは基本である、床に対するウェイトの乗せ方やスタンスをみっちり叩き込む。土台ができないとどの世界でもトップへ行けません。基本ができたら音楽を流す。スタンダードとラテンの計10種目、途中休憩なしで踊り切らせました。かなりスパルタだったと思います。でもそうしないと勝てないので(笑)。それでもすぐに結果が出る訳ではない。そんな状況を支えたのが海外での経験だった。「海外で学んだことが体の中に入っているの、それを実践的に教えることができます。長年学んだ引き出しがいっぱいありました。学生が伸び悩むと別の引き出しから持ってくる。3年目にカップルで全日本チャンピオンが誕生し、その3年後には全日本団体でチャンピオンになりました」。

指導者としても常に勉強を怠らない。「ダンスも時代とともに変わっていきます。常に新しいものを取り

入れる勉強をしないと教えることはできません。東京での指導者時代は毎年、海外で勉強していました。多数のA級選手を育てあげた。

### ■佐賀のペア成長楽しみ

8年前に佐賀に帰ってきた。現在、佐賀新聞文化センターなどで指導している。「最近、一番嬉しいのが、文化センターで出会ったペアがめきめきと上達していること。指導して4年目ですが、去年からコンペに出場していて、佐賀で開催された九州大会のある部門で優勝しました。すごく成績が伸びていて注目されています。チャンピオンになるよう育てようと思っています」。

「ダンスはいくつになっても楽しめる」と川津さんは笑う。「一番の課題はダンスを音楽に対してどう表現するか。音楽に負けちゃいけない。ただ合わせるだけでは人を魅了できません。踊りを通して音楽に勝たないと見る人を感動させられない。それが永遠の課題ですね」。川津さんはいつまでも壁を見つけ乗り越え続ける。